

ぼさぼさいーか

房総の花畑と石海苔

伴 勇貴

今年の東京都心の冬の暖かさは異常で、まだ初雪も降らない。このぶんだと今年
は雪が降らないかもしれない。「地球温暖化」とか「ヒートアイランド」とかが長
らく叫ばれてきているが、それでも去年までは相変わらず「三寒四温さんかんしおん」を繰り返
しながら、一步一步、春が近づいてきていたように思う。ところが、今年はいきなり
春になってしまった。すでに「春一番」が吹いた。

日の入りは延びたものの、まだ日の出は六時半頃である。あと一ヶ月もすれば日
の出は五時頃になって、今住んでいる高層マンションの二十八階の部屋は東向きの
ため、まともに目映まばゆい朝日を受け、深酒ふかざけをした翌朝などには恨みうらたくなる。まさに
「春眠しゅんみん 曉あかつき を覚えおぼえず」である。その意味では、朝日もそれほど眩まぶしくはなく、まだ
春だとは思わないが、昼間の暖かさは、もうすっかり春である。

このところ毎年花摘はなつみに行っている
房総半島の先端に近い外房そとぼうの千葉県
千倉ちくらの花畑のストックもキンセンカも
二月初めで満開時期を過ぎていた。例年
より二、三週間は早いという。

だから「出来るだけ蕾つぼみのたくさん残
っているものを選んだ方がよいよ」、「ど
れでも三十本で五百円、菜花なばなは好きなど
け摘つんで持って行って良いよ」と親父は
言う。ハサミと籠かごを受け取り、六十本の
ストックやキンセンカ、それとたくさん
のお浸しなど食用の菜花なばなを摘つんで千円
を払った。



都心から外房の千倉や鴨川に行くのは本当に便利になった。東京湾を横断する「アクアライン」に接続する、房総半島を内房から外房に横断する山越えの有料道路がすべて繋がったからだ。ところどころ一車線になっただけだけれど、以前とは比較にならなく楽になった。

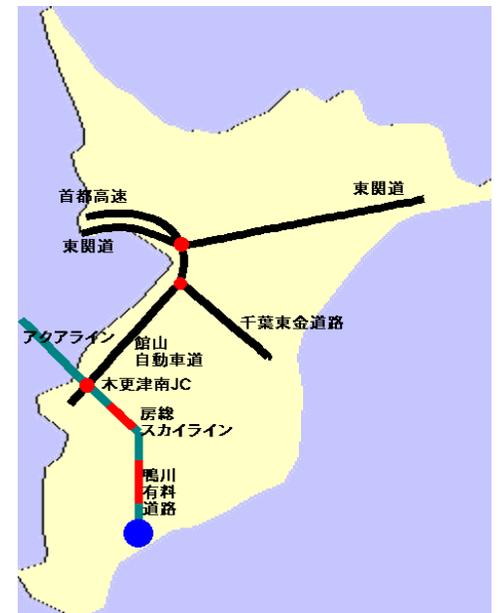
それまで有料道路は寸断されており、途中で何度も一般道に降ろされ、迂回させられ、不便なこと極まりなかった。中途半端に有料道路を使うより裏道の一般道を走る方が早いという状況だった。

有料道路が繋がって便利になったので、以前よりもやってくる自動車は増えて、時間帯や曜日や季節によっては、それでも混雑することは想像に難くない。でも二月初めの日曜日、午前八時頃に出たら、安全運転で、ところどころ立ち寄りながら走っても十時前には花畑に着いてしまった。

有料道路を降りて千倉に向かう外房の海岸沿いの道を走る途中、波頭の美しさと海の匂いに誘われて、車を留めて浜辺も散策した。長く続く砂浜の沖合では数十人のサーファーが荒い波と戯れている。その浜辺の端にある小さな漁港の周辺では、地元の人たち——多分、僕よりは数歳かは年上の「老人」たちが黙々と岩海苔を採っている。

突然、親しみを覚えて、話し掛けた。いろいろ尋ねたら、目の前に広がる岩礁に行けば、もっとたくさん採れるのだが、危ないから、そこで採っているのだという。良く洗って砂を除き、味噌汁に入れて食べる。香りが良くてとても旨い。あくまで

紅藻植物、アマノリ属の海藻のなかで、岩礁上に自生するものの総称。この仲間にはアサクサノリのように内湾で養殖されるものもあるが、大多数は外海の岩礁上に生える野生のものである。これらを総称してイワノリ、クロノリ、アマノリなどと呼ばれている。各地の名産、土産物として販売されている。冬から春にかけて繁茂する一年生の藻で、外海の荒波にもまれて育ったノリであるため、養殖ノリに比べて、色沢がよく、香味が強い。



の自家用で採っているのだが、商品としては結構な高値で取引されているようだとも誇らしげにいう。

取っ付きにくい雰囲気だったが、声を掛けたら饒舌になって、いろいろ説明してくれた。最後に、お礼を言って別れようとした際には、岩海苔の生えている所は滑りやすく、それでおお怪我をする人も少なくないから注意するようにとまで心遣いしてくれた。

岩海苔が高いことぐらいは知っている。と言っても、千円ぐらいを払えば、砂を取り除いた生海苔や干海苔などを都心でも意外に簡単に入手できる。ここまで単純に往復するのに必要なガソリン代や有料道路の料金などの合計よりも遙かに安い。もちろん時間も掛からない。

岩海苔を採っている「老人」たち、それも、多分、僕よりも数歳ぐらいしか年上でない人と、そのかたわらにいる自分自身、さらに沖合でサーフィンに興じている若者たち、そしてその手前の「老人」たちが危ないと言った岩礁の上で熱中している中年らしき二人の釣人……。

岩海苔を採っている「老人」に礼を言って別れ、文鎮になりそうな石を探しながら砂浜を歩いていたら、突然、心地良さとはまったく異質の感情に襲われた。人の不幸とはいったい何なのかという基本的な命題に加えて、最近とくに



叫ばれている日本社会の格差拡大とか高齢化などの問題が浮かんで、頭にこびり付いた。

僕自身は、その一方で、明るい太陽、見渡す限りの青海原と「癒^いしの音」として使われる岸に打ち寄せる波の音、それとオゾンがいつぱいのすがすがしい空気と海の香^かり中に全身を漬^つけ込み、それにコンクリート舗装の道路では得られない足下から伝わってくる大地の感覚を重ね合わせて華^{はな}やいだ気分になっている。

この板挟みの状況から脱出したのは、満員の観光バス数台が通過するのが目に入ったからだ。これは混むことになりそうだ、急いで花畑に向かわなくては着くのも遅くなりそうだという現実^じに気が付いたからだ。

急いで花畑に向かい、たくさんストックやキセンカや菜花を摘んで帰宅の途に付いた。「駅の道」は混んでいて駐車スペースがなく、「地魚料理」などの看板を掲げる店も数件覗^{のぞ}いたけれど、満員で一時間待ちだなどという。それでコンビニでおにぎりとお茶を買い、食べながら運転して帰った。反対車線はかなり混んでいたけれど、上りはまだガラガラだった。午後三時前には自宅に戻った。充実した夢のような一日だった。

(二〇〇八年冬)

